〔第３種郵便物認可〕

モンゴル初の知能検査

名大研究チーム開発

子ども1200人調査し日本版改定

発達障害支援 後押し

モンゴルの子どもを対象とした初めての知能検査を、名古屋大の研究チームとモンゴル国立教育大が共同で開発した。約3年半かけてモンゴルの子ども約1200人に調査を実施。日本の検査で使われる内容をその国の文化や生活習慣に合わせて変更した。近年、モンゴルで認識が広がっている発達障害の支援を後押しするものとして注目されている。

開発したのは、名古屋大心の発達支援研究実践センターの研究チーム。同チームは2013年からモンゴル教育大と協力し、モンゴルの子どもの心や発達の問題について支援・研究を行ってきた。

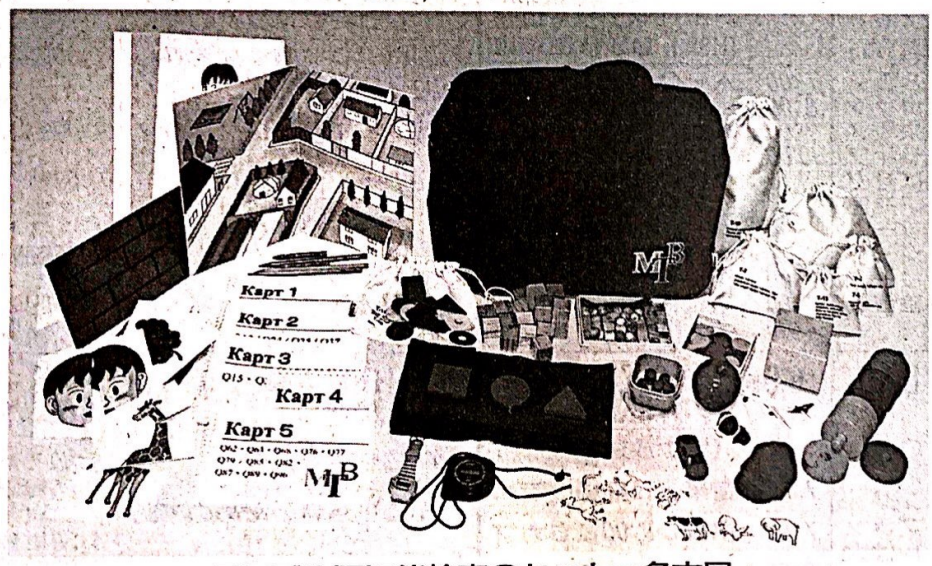
モンゴルでは近年、発達障害への関心が広がり、支援が必要との声が高まっている。発達障害は脳の機能が十分に働かない障害で、読み書きや計算など特定のことが苦手な「学習障害」▽注意力がない「注意欠如多動症」▽コミュニケーションが難しい「自閉スペクトラム症」――などに分類される。周囲が障害を理解し、特性に合った支援を行うことが求められている。

そこでチームが着目したのが、日本の知能検査。日本では発達障害や知的障害のある子どもの状況を正しく把握し、必要な支援につなげる検査として活用している。チームは16年、日本で幅広く利用されている「田中ビネー知能検査Ⅴ」を基に「モンゴル版」の開発をスタートした。

国によって教育内容や文化も異なるため、日本版を翻訳しただけでは、モンゴルの子どもの発達を適切に測定できる検査にはならない。チームはモンゴルの子どもに適した問題内容を開発するため、約1200人の子どもへの調査を元にモンゴル版に改定。日本版のイラスト問題で使っている救急車をモンゴルの救急車に変更したり、モンゴルのなじみのある行事を文章問題の題材にしたりするなど工夫を重ねた。

チームは21年1月からモンゴルで子どもに関わる専門職の人を対象に、モンゴル版の使い方研修を始める予定。研究チームリーダーの野邑健二・名大心の発達支援研究実践センター特任教授は「今後は子どもの発達を専門的に支える人材の養成もモンゴルで行っていきたい」と話している。

【細川貴代】



モンゴル版知能検査のセット＝名古屋大心の発達支援研究実践センター提供

CamScannerでスキャン